

都留市の歴史(8)：近世(一)

近世初頭の領主たち

徳川・豊臣系大名の交互領有時代

徳川と北条の和議

天正十年(一五八二)十月末、甲州制覇を争っていた徳川氏と北条氏の間で和議が結ばれた。その結果、都留郡および佐久郡は徳川分、西上野は北条分となり、家康の二女督姫を北条氏直へ嫁がせることで両者の同盟関係が締結された。ここに甲斐一国は徳川支配地となる事が確定した。とくに都留郡は対北条戦の功労者鳥居元忠に与えられた。このとき家康は元忠に対して、この都留郡の分与は領地を割き与えるのではなく、お前の戦功によって勝ち取ったものであると述べたという。

鳥居元忠の都内支配

鳥居氏の史料は乏しいが、市内には天正十年十一月二十三日付の元忠によると伝えられている大幡広教寺の制札がある。これら各地の寺社に残るわずかな史料から、天正十年中は占領時期で、十一年になって元忠の郡主としての立場が公認され、その支配は翌十二年から実質を伴うように思われる。確実なことは言えないが、一郡を単位とした支配の萌芽がありながら基本的には、成瀬・日下部の徳川家甲斐国両奉行の管轄のもとに終始したのではなからうか。

豊臣系大名の入国と郡内

鳥居元忠はなお信濃計略・真田・小田原攻めと、徳川軍の大将としていそがしく戦場を駆け巡った。

天正十八年、北条氏の滅亡により、豊臣政権の力は東国へと及び、徳川は関東へ移封され、甲斐は豊臣秀吉の養子となった羽柴秀勝、腹心加藤光泰、五奉行の一人浅野長



長生寺山門(羽根子)

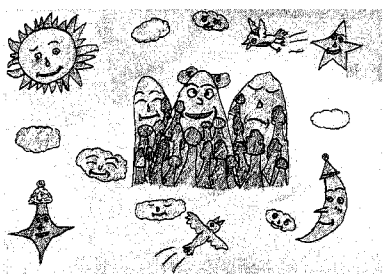
年(一五九〇)八月から同十九年二月までと短かったため、十分な展開をしなかったといえよう。跡を受けた加藤光泰は当初養嗣子として迎え、実子誕生後は家臣とした加藤作内光吉を谷村に配置し、都留一郡範囲での管轄を委ねた。しかし光泰は、二年後の文禄二年(一五九三)朝鮮戦役で死去し、嗣子貞泰は美濃へ転封となるため、光吉もまた十分な時間を持てずに都留郡を去った。その跡には浅野長政・幸長父子が甲斐に入った。都留郡には重臣の浅野左衛門佐氏重が配置された。

検地と寺社領の安堵と寄進
いわる太閤
検地や、甲府本家にならい、氏重も文禄三年(一五九四)郡内領の検地を実施

政とその子幸長ら、豊臣家近臣による一国支配が続けられる。徳川旧領では分割支配が進む中、甲斐は一国支配が継続し、豊臣政権は甲斐を関東徳川氏への押えと位置づけていたと思われる。

この一国支配のもとではあるが、関東と境を接する都留郡には一郡管轄の体制が敷かれていった。羽柴秀勝の時代には、三輪五右衛門尉近家が国中にも関与しつつ主に郡内を担当していたと思われる。ただし、秀勝の支配は天正十八

配水タンク
原画決定



七月号の広報で募集しました、夏狩の中央自動車道脇にある配水タンクの原画に、小学生から四十二点の応募がありました。審査の結果、禾生第一小学校の高山陽子さんの作品「太陽とみどり」に決定しました。水道課では、この作品を十二月までに配水タンクに描く予定です。



大賞	高山陽子	禾一小3年
入選	中野ともか	東桂小3年
生駒洋平	東桂小3年	
藤本まりか	谷二小2年	
芳野千晃	谷二小5年	
小林あいみ	谷一小2年	
西口美樹	谷一小2年	
小林祥典	禾二小2年	
小俣香奈子	禾二小4年	
中島悠太	禾一小2年	
佐藤功如	禾一小3年	
小宮涼太	禾一小6年	

(敬称略)

カメラ教室開催
のお知らせ

宝の山ふれあいの里で、自然を被写体としたカメラ教室を開催します。
日時 11月29日
午前9時30分～午後2時
場所 宝の山ふれあいの里
参加費 2000円(フィルム代・現像料・昼食代含)
申込・問合先 社会教育課 文化振興係

河川や水路に、ごみ・灰などを
流さないようにしましょう

ドラム缶焼却炉を河川や水路上沿いに置いていらっしゃる方は、環境保全のため撤去してください。焼却灰は水質汚濁の原因となります。きれいな川をとりもどすのは私たちです。
皆様のご協力をお願いします。